

『小野篁歌字盡』の研究(三)

萩原義雄

歌字盡における特殊漢字訓

ここに掲げた傍訓漢字は、室町時代を代表する古字書『慶長十五年版倭玉篇』(以下単に『倭玉篇』と略称)とキリシタン資料『落葉集小玉篇』に現在の「常用漢字表」を加えて照合した結果、見いだせなかった語群である。この傍訓と漢字の関係がいかなるものか、さらに掘り下げて考察を加えてみようとする。

1 あぢ [鱣] 96-2句

『倭玉篇』では「アヂ」の漢字として「鱣」「鰈」を収載し、「鱣」は未収載。ただし、『元龜字叢』は標出漢字のみで無訓、『拾篇集』『玉篇略』に「鱣(アチ)」、『篇目次第』には「アヂ」で三漢字とも収載している。「鱣」は先行字書『和名抄』『新撰字鏡』『色葉字類抄』『下学集』などに広く見え、寧ろこの『倭玉篇』がこの字を収載していないのが特出する点である。

2 あつる [配] 13-5句

『倭玉篇』では「アツル」を表す漢字は無く、「配」は「クバル、ナラウ、アフ、ツ、トモナフ、ワカツ、ア

ワス」といった七訓が収載されているだけで「アツル」の訓は見えない。『拾篇集』『音訓篇立』に「アツ」、『夢梅本倭玉篇』に「アタル」が近似訓として見える。

3あと [足] 34-2歌 41-4歌

『倭玉篇』では足扁の漢字として「蹤」「蹠」「跡」「蹟」「蹠」「跡」「蹠」「跡」「蹠」「跡」「蹠」「跡」を収載し、「足」は「アシ、タンヌ、タレリ、トヰマル、キタル、アキダル、フモト、ユタカ」といった八訓が収載されているだけで「アト」の訓は見えない。寧ろ『落葉集小玉篇』四ウ二に示す篇名と同じ「あとへん」を用いたと考える。

4あめ [糒] 112-1句

『倭玉篇』では「アメ」の漢字として「飴」「飴」「飴」「飴」「飴」「飴」「飴」を収載し、このうち「糒」が『夢梅本倭玉篇』五八八・二に「糒飴也／アメ 糒同上／アメ」と見え、確認することが出来る。

5あられ [霰] 78-4句

『倭玉篇』では「アラレ」の漢字として「霰」だけを収載し、「霰」は未収載。ただし、『夢梅本倭玉篇』『玉篇略』『慶長中刊倭玉篇』には両漢字とも収載し「アラレ」の訓が見える。『元龜字叢』『真草倭玉篇』は「アラレ、シグレ」と見える。『弘治二年本倭玉篇』は「アラシ」とする。『下学集』そして節用集類では『易林本』に見える。

6いもうと [娣] 51-2句

いもと [娣] 51-2歌

『倭玉篇』では「イモウト」の漢字として「妹」、「イモト」の漢字として「娣」を収載し、「娣」は「ヲトウト、ヨメ、ヲト」の二訓が収載されているだけで「イモウト、イモト」の訓は見えない。

7うぐひ [鱧] 100-3句

『倭玉篇』では「ウグヒ」の漢字として「鱧」だけを収載し、「鱧」は未収載。「鱧」の字で『玉篇略』三六ウ六に「ウヒク」、『元龜字叢』に「ウクヒ」、『慶長二年古写本玉篇』に「ムセツ、ウクヒ、ヲクヒ也」と見える。

8うば [姥] 52-1句

『倭玉篇』では「ヲバ」の訓を収載し、転訛した「ウバ」は未収載。系統諸本『玉篇略』は「老母也」とする。

9うむ [紡] 91-1句

『倭玉篇』では「ウム」の漢字として「績」「緝」を収載し、「紡」は「ツムグ、ヲウム、イト」の三訓が見え、このうち「ヲウム」が近似の訓で『日本国語大辞典』の「おうみ」の項を繙くと、「苧の纖維をよりあわせて糸を紡(つむ)ぐこと」と見え、「ウム」と「ツムグ」は類似する訓で本書は「紡」と「績」の訓が逆になっている事がわかる。このほか『音訓篇立』が「紡」に「ヲウム、ウム、ツムク」の三訓、『慶長中刊倭玉篇』に「ツムク、ヲウム、ウム、ナハ、ヲク」の五訓を収載し、「ウム」と「ツムグ」を共有している。

10うるほひ [霽] 79-2句

『倭玉篇』では名詞化した「ウルヲイ」の漢字として「沽」、「ウルヲヒ」で「鮑」を収載し、「霽」は動詞訓の「ウルヲウ」を収載している。『慶長二年古写本玉篇』も同じく「ウルヲウ」、『夢梅本倭玉篇』は「ウルホウ」、『玉篇略』『弘治二年本倭玉篇』『寛文二版玉篇』は「ウルヲス」といずれも動詞訓である。

11うゑき [栽] 37-1句

『倭玉篇』では「ウヘキ」の漢字として「樹」だけを収載し、「栽」は「ウ、ル」を収載している。ただし、『拾

『倭玉篇』だけは「ウフ、ウエキ、ワカツ、ワキマフ、タ、ム」と動詞訓「ウフ」の後に名詞訓「ウエキ」を収載している。

12 えそ [鱒まそ] 101-1句

『倭玉篇』では「エソ」を表す漢字は無く、「鱒」も未収載。系統諸本も同じ。

13 おきて [掟] 86-1句

『倭玉篇』では「オキテ」を表す漢字は無く、「掟」も未収載。ただし、『玉篇略』と『慶長中刊倭玉篇』に「ヲキテ」、『篇目次第』に「オキテ」、『夢梅本倭玉篇』も「オキテ」を収載している。

14 おどす [威] 95-4歌

『倭玉篇』では「オドス」の漢字として「嚇」「怖」「畏」「猙」の四訓を収載し、「威」は未収載。ただし『夢梅本倭玉篇』は「ヲドス」、『玉篇略』『音訓篇立』に「ヲトス」、「篇目次第」は「オトス」を収載している。『弘治二年本倭玉篇』は「ヲトメ」とする。

15 およぶ [覃そよぶ] 95-3歌

『倭玉篇』では「ヲヨブ」の漢字として「切」「襲」「ヲヨブ」で「暨」「及」「迄」「遂」「迨」「逮」「來」「戮」「泪」「泣」「昶」「暨」「累」「被」「裛」「隸」「隶」の十九訓を収載し、「覃」は未収載。ただし、『篇目次第』、『拾篇集』、『玉篇略』、『音訓篇立』はともに「ヲヨブ」とし、『夢梅本倭玉篇』は「及也ヲヨブ」と収載している。

16 おろかなり [鹿鹿鹿] 57-2句

『倭玉篇』では「ヲロカナリ」の漢字として「們」「儻」「娥」「頑」「駭」の五訓を収載し、「鹿鹿鹿」(鹿)は「アラシ、

ヲロソカ、ヲホヒナリ」を収載している。ただし、『小野篁歌字盡』の刊行年代が同じ『寛文二版玉篇』に「ヲホヒナリ、アラシ、ヲロカ」の第三訓として見える。また『弘治二年本倭玉篇』には略体字「麁」で「ヲロカ也／大也」と見える。

17かぎ [鑑] 83-1句

『倭玉篇』では「カギ」の漢字として「鍵」「鉤」「鑰」「鑿」「釵」の五訓を収載し、「鑑」は未収載。ただし、『篇目次第』九〇八・三は「鑑」を「俗用」として収載し、『慶長二年古写本玉篇』に「カキ」と見える。

18かしまし [姦] 55-2句

『倭玉篇』では「カシマシ」の漢字として「噉」だけを収載し、「姦」は「アサムク、ヨコサマ、カダマシ、サハグ、アク、ヒソカ、イツハル、アハス、サ、ヤク、カクム」の訓を収載している。このうち、「カダマシ（心がねじてて邪悪だ。正直でない。の意）」は第二拍の「ダ」と「シ」の字形相似を想定し、これを系統諸本にて語頭「カ」の形容詞訓を見るに、『篇目次第』『慶長中刊倭玉篇』は「カタマシ、カマヒスシ」、『弘治二年本倭玉篇』に「カシマシ、カタマシ」、『拾篇集』は「カヲマシ、カシマシ、カマヒスシ」、『玉篇略』は「カマヒスシ、カシマシイ」、『音訓篇立』は「カタマシ、カシマシ、カマヒスシ」、『夢梅本倭玉篇』は「カタカマシ」となり、「カシマシ」の訓を収載しているのは『拾篇集』と『弘治二年本』だけで、近似訓として『玉篇略』の「カシマシ」と『音訓篇立』の「カシカマシ」があるに過ぎない。この「カシマシ」「カタマシ」の訓については後日詳細を期す予定である。

※19かづく [襲] 31-4歌

『倭玉篇』では「カツク」の漢字として「被」だけを収載し、「襲」は「アカラサマ、ヨル、カサヌ、ヲヨフ、ツイニ、キヌガサネ、ヲソフ、ヲソル、ツ、シム、ヲウ、ツキアワス、キル」の訓を収載している。系統諸本も「カツク」は未収載。推察するに「カサヌ」と「ツグ」(『弘治二年本倭玉篇』に見える)の複合した「カサネツグ」の中間二音を省略した「カツグ」が更に第二音節に濁音符号が転移して「カツク」となったものか。

20 かぶり [冠] 124-2 歌

『倭玉篇』では「カブリ」を表す漢字は無く、「冠」は「カンモリ、カウムラシム、トツサカ」の三訓を収載している。ただし、『篇目次第』『音訓篇立』『慶長中刊倭玉篇』に「カブリ」の訓を収載している。

※21 かます [鯛] 97-1 句

『倭玉篇』では「カマス」の漢字として「鯢」「鮓」「鱧」を収載し、「鯛」は未収載。『玉篇略』には「フトキウヲ」、『寛文二版玉篇』にただ魚の総称名「イヲ」とあるにすぎない。

22 きのね [根] 44-3 歌

『倭玉篇』では「キノネ」の漢字として「株」「柢」を収載し、「根」は「ネ、ハジメ、モトヅク、サネ、フモト」を収載。ただし、『篇目次第』『慶長中刊倭玉篇』に「キノネ」の訓を収載している。

23 くのぎ [榧] 6-4 句

『倭玉篇』では「クヌギ」の漢字として「榧」を収載し、「榧」は「カシハ、クスリノキ」の二訓を収載。系統諸本すべて「榧」にこの訓はなく、「榧」の字形相似に拠るものと考えられる。因みに『玉篇略』と『元龜字叢』には「榧」も「榧」も「カシハ」とする。

※24くひ [杭] 7-2句

[粒] 7-1句

『倭玉篇』では「クイ」の漢字として「檣」「櫛」「杙」「クキ」で「椿」を収載し、「杭・粒」は未収載。『音訓篇立』に「杭」で「クヒ、クヒセ」と見える。

25けもの [犬] 3 2-4歌・4 5-4歌

『倭玉篇』では「ケモノ」の漢字として「狡」だけを収載し、「犬」は「イヌ」の訓を収載している。系統諸本すべて「イヌ」の訓で、寧ろ『落葉集小玉篇』八オ六に示す篇名と同じ「けものへん」が用いられていると考えた方が良いかも知れない。

26けやき [檜] 5-4句

『倭玉篇』では「ケヤキ」の漢字として「槻」だけを収載し、「檜」は未収載。系統諸本もまちまちで、『篇目次第』は「タヒチ」、『慶長二年古写本玉篇』は「カシノキ」、『玉篇略』は「トカ」、『拾篇集』は「カシノキ、心ノハシラ」、『元龜字叢』には「カシノキ、トカ」、『音訓篇立』には「カシ、タヒ」を収載している。

27こごと [阜] 4 4-5歌

『倭玉篇』では「コザト」の漢字は未収載。「阜」は「サカンナリ、ヤマ、コエタリ、クマ、アツシ、アガル、ナガシ、ユタカ」の八訓を収載する。これも『落葉集小玉篇』七オ二に示す篇名と同じ「こごとへん」を用いたと考えた方が良い。

28こそぐる [擦] 1 7-5句

『倭玉篇』では「コソゲル」の漢字は未収載。「擦」は「モム」の訓を収載する。ただし、『拾篇集』『玉篇略』『音訓篇立』『元亀字叢』には「コソクル」の訓を収載する。

※29ことゆ [言] 9-2歌

『倭玉篇』では「コトユ」の漢字は未収載。「言」は「イフ、モノイフ、マウス、モノガタリ、コト、マウサク、コレ、ノタマハク、コトバ、イツシ、ワレ、イエル、コ、ニ、カタラウ」の十四訓を収載し、このうち「コト」と「コトバ」が近似訓であるに過ぎない。これも推察するに「コト」と「ユウ」(『慶長二年古写本玉篇』に「コト／ユウが見える)の複合した「コトユウ」の最終母音「ウ」が脱落した語か。

30ころ [比] 64-3歌

『倭玉篇』では「コロ」の漢字は未収載。「比」は「タグヒ、ナラブ、チカヅク、シタシ、ヨシ、ソナフル、カハル、コロライ」の八訓を収載する。このうち「コロライ」が近似訓である。『音訓篇立』は「コロヲヒ、コノコロ」、「寛文二版玉篇」も「コロライ」の近似訓を収載する。『弘治二年本倭玉篇』に「コノコロ」の後に「コロ」の訓が見える。

31さかき [榊] 5-1句

『倭玉篇』では「サカキ」の漢字は未収載。「榊」も未収載。ただし、『篇目次第』『拾篇集』『玉篇略』『音訓篇立』『元亀字叢』には収載している。

32さとる [察] 71-5句

『倭玉篇』では「サトル」の漢字として「僧」「佛」「皎」「明」「叡」「見」「覺」「覷」「聰」「哲」「喩」「體」「惺

「悟」「慧」「慙」「諛」「試」「識」「條」「達」「烏」「智」「獄」「解」「學」「寤」を収載し、「察」は「カミル、ツマビラカ、アキラカ」の三訓を収載。ただし、『拾篇集』『夢梅本倭玉篇』『寛文二版玉篇』には「察」で「サトル」を収載している。

33 さはら [鱒さむら] 96-4句

『倭玉篇』では「サワラ」の漢字として「鱒」「鱒」を収載し、「鱒」の漢字は未収載。「鱒」と「鱒」の字形相似と見る。ただし、『篇目次第』『寛文二版玉篇』は「鱒」で「サハラ」、『拾篇集』は「鱒」で「サワラ」を収載している。これも先行辞書の『色葉字類抄』『名義抄』『下学集』に見え、節用集類へと続く語である。

※34 しいら [鰈] 95-5句

『倭玉篇』では「シイラ」の漢字は未収載。「鰈」は「ウナギ」の訓を収載している。また、『夢梅本倭玉篇』『寛文二版玉篇』も「ウナギ」、『篇目次第』は漢字のみで訓無しで収載している。

※35 しつけ [鮓] 9-1句

『倭玉篇』では「シツケ」の漢字は未収載。「鮓」も未収載。系統諸本も同じ。

36 すくふ [匕] 63-3歌

『倭玉篇』では「スクフ」の漢字として「賑」「抗」「拮」「振」「恤」「薩」「彌」「利」「救」「濟」「渡」「汲」「沛」「漉」を収載し、「匕」は「ハシ、カイ」の二訓を収載。また、系統諸本のうち『夢梅本倭玉篇』は「匙シ也/矢ヤノ鏃ヤシリ也」、『弘治二年本倭玉篇』は「カイ/匙也」、『玉篇略』は「カイ、ヤシリ」、『寛文二版玉篇』も「ハシ、カイ」の名詞訓を収載しているに過ぎない。

※37 すりみがく [摩] 21-4 歌

『倭玉篇』では「スリミガク」の漢字は未収載。「摩」は「スル、セマル、ナヅル、ミガク」の四訓を収載している。このうち「スル」「ミガク」の二つの動詞訓を合成して示したものと考えられる。しかし、系統諸本のうち『夢梅本倭玉篇』は「スル、ナヅル」、『篇目次第』『音訓篇立』は「スル、ナツ」、『元龜字叢』『慶長二年古写本玉篇』は「ナツル、スル、オホシ」(『玉篇略』は第三訓を「ヲホシ」と表記する。)、『拾篇集』は「ナツ、スル、イツワル、トク」(「磨」の字に「ミカク」の訓なし)、『類字韻』『寛文二版玉篇』は「ナヅル」、『慶長中刊倭玉篇』は「スル」のみで「ミガク」は「磨」の字とするのが通例であり、『慶長十五年版倭玉篇』だけが特出している。

38 たばかり [𪛗] 55-1 句

『倭玉篇』では「タバカル」の漢字として「媒」「獵」を収載し、「𪛗」の漢字は未収載。ただし、『音訓篇立』に「タハカル」の訓を収載している。

39 つち [巳] 61-4 歌

『倭玉篇』では「ツチ」の漢字として「土」「墀」「地」「坂」「埭」「塹」「塹」「塹」「塹」を収載し、「巳」は「ツチノト、ヲノレ、ヲノガ」の訓を収載している。このうち、「ツチノト」が近似訓で系統諸本のうち『弘治二年倭玉篇』『玉篇略』にもこの近似訓が見える。

40 つむぐ [績] 91-2 句

『倭玉篇』では「ツムグ」の漢字として「綜」「紡」を収載し、「績」は「ウム」の訓を収載している。ただし、『弘治二年本倭玉篇』『慶長中刊倭玉篇』に「ツムク」の訓、『玉篇略』には「ツムキ」の訓、『音訓篇立』には「績」

の字に誤るが「ツムク」の訓が見える。

41どぢやう〔鮎〕 98―4句

『倭玉篇』では「ドヂヤウ」の漢字は未収載。「鮎」も未収載。この字『篇目次第』一〇九二・二に見え、「ハエ」とする。他の系統諸本も未収載。寧ろ「鮎」は節用集類に多く見え、「ドヂヤウ」とする所からして依拠した資料が異なる可能性が出てくる。他に『璫囊鈔』に見える。

42とびうを〔鮠〕 96―1句

『倭玉篇』では「トビウヲ」の漢字として「鯨」「鰻」を収載し、「鮠」は未収載。『夢梅本倭玉篇』は「魚也／アミウヲ」、『篇目次第』は訓無しで収載している。ただし、『慶長二年古写本玉篇』に「トビイヲ」の訓が見える。『寛文二版玉篇』は「アミウヲ」とする。

43とぼしび〔灯〕 76―2句

『倭玉篇』では「トボシビ」の漢字は未収載。第二拍が音相通例の「トモシビ」で「釭」「烽」「燎」「燈」「炷」「炬」「燭」を収載し、「燈」の異体字「灯」は未収載。系統諸本のうち『夢梅本倭玉篇』は「火也」と註している。他は未収載。

※44なぐさむ〔拵〕 9―3句

『倭玉篇』では「ナグサム」の漢字として「慰」を収載し、「拵」は未収載。この字出書不明。

45にしん〔鯡〕 100―2句

『倭玉篇』では「ニシン」の漢字は未収載。「鯡」も未収載。系統諸本のうち『夢梅本倭玉篇』は「魚子」、『篇

目次第』は「イヲノコ」を収載している。ただし、『慶長二年古写本玉篇』に「ニシ」の訓が見える。

46ねらふ [規] 43―5句

『倭玉篇』では「ネラフ」の漢字は未収載。「規」は「ミル、ウカブ、ムカフ、モトム、ウカヰイミル」の訓を収載している。系統諸本も「ネラフ」の訓は見えない。

47ひきがへる [墓] 46―4句

『倭玉篇』では「ヒキガヘル」の漢字として「蝮」「蟾」「蝮」「蝮」「蝮」「蝮」を収載し、「墓」は未収載。系統諸本のうち『篇目次第』『拾篇集』は「カヘル」、『寛文二版玉篇』『真草本倭玉篇』は「カイル」の訓を収載している。『弘治二年本倭玉篇』は「蝦蟇(カマ)」で「カエル／ヒキ」とする。

48ひつ [積] 8―5句

『倭玉篇』では「ヒツ」の漢字として「積」「積」「積」を収載し、「積」は未収載。『夢梅本倭玉篇』は「木可／ツエノキ／爲杖」を収載している。ただし、『篇目次第』『音訓篇立』『慶長中刊倭玉篇』に「ヒツ」の訓が見える。

49ひな [鄙] 38―2句

『倭玉篇』では「ヒナ」の漢字として鳥の幼きものを表す「鶖」「鶖」「雛」を収載し、都を遠く離れた土地を表す「鄙」は「ハヂ、イヤシ、イナカ」の三訓を収載し、系統諸本にも「ヒナ」の訓は見えない。

50ひねる [捻] 40―1句

『倭玉篇』では「ヒネル」の漢字として「捏」「捫」「斂」を収載し、「捻」は「ヲサム、ツク、ハザマル、カヌ、

カキヲサム」と「ヲサム、ハサマル、ツク、サス、カヌ」とを収載している。ただし、『弘治二年本倭玉篇』『拾篇集』『玉篇略』『音訓篇立』『篇目次第』『夢梅本倭玉篇』『慶長中刊倭玉篇』『寛文二版玉篇』それぞれに「ヒネル」の訓が見える所からして、寧ろ『慶長十五年版倭玉篇』が特出しているといえよう。

51 ひばな 〔火火〕 58-1句

『倭玉篇』では「ヒバナ」の漢字は未収載。「火火」は「ホノヲ」の訓を収載している。または『拾篇集』に「アフル」、『音訓篇立』は「ヒノハナ、ホノホ」と近似訓、そして『元龜字叢』に「火華也」の漢字注、『夢梅本倭玉篇』には「火華也／ヒバナ、ホノヲ」と「ヒバナ」が見え、『寛文二版玉篇』も「ヒバナ」の訓が見える。

52 ふき 〔落〕 50-3句

『倭玉篇』では「フキ」の漢字として「露」を収載し、「落」は未収載。ただし、『篇目次第』『拾篇集』『音訓篇立』に近似訓の「フ、キ」、そして『玉篇略』には「フキ、フ、キ」の訓が見える。

※53 ふためく 〔章〕 28-5歌

『倭玉篇』では「フタメク」の漢字は未収載。「章」は「アワテル、アキラカ」の二訓を収載している。系統諸本いずれも「フタメク」の訓は見えず、寧ろ「周章狼狽」の熟字訓「アワテフタメク」の後部分を「フタメク」と採録したのか。

54 まかなひ 〔まかない 略〕 41-2句

『倭玉篇』では「マカナイ、マカナフ」の漢字は未収載。「略」は「ヲクリモノ、ヲクル、マイラスル、マイナイ」の四訓を収載し、このうち「マイナイ」と「マカナイ」は片仮名の「イ」と「カ」の字形相似と見ることが出来る。

る。普通「まかなう」は「賄賂」の「賄」の字で表している。

※55まつ [忝] 73-2歌・114-4歌

『倭玉篇』では「マツ」の漢字として「松」を収載し、異体字の「忝」は未収載。系統諸本には見えない。

56ま、 [儘] 14-4句

『倭玉篇』では「マ、」の漢字は未収載。「儘」も未収載。系統諸本にも見えない。これも「我儘(わがま、)」の後ろの部分「マ、」を採録したもののか。

※57まる [磨] 21-5句

『倭玉篇』では「マル」の漢字として「丸」を収載し、「磨」は未収載。系統諸本にも見えない。

58めめざこ [魚魚] 57-3句

『倭玉篇』では「メ、ザコ」の漢字は未収載。「魚魚」も未収載。系統諸本をみるに『篇目次第』は反切のみで訓はなく、『拾篇集』は「アイヲ、アサラカ也」、『玉篇略』は「アサラケキ」、『夢梅本倭玉篇』は「鳥獸新殺、アザラケシ、日一亦作鮮」を収載している。ただ、『慶長二年古写本玉篇』に「メ、イコ、アサラケ」とあり、さらに『元龜字叢』の「アサラケ、メ、サコ」と安田文庫蔵『玉篇要略集』に「メ、ザコ」の訓が見える。

※59やさしき [詭] 9-2句

『倭玉篇』では「ヤサシ」の漢字として「娚」を収載し、「詭」は未収載。「譚」で「カマビスシ」の訓。系統諸本でも『音訓篇立』『慶長二年写本玉篇』は「カマヒスシ」、『玉篇略』は「カ□□□シ」としか見えない。

60よこさま [衡] 74-5句

『倭玉篇』では「ヨコサマ」の漢字として「奸」「姦」を収載し、「衡」は「ヨコタハル、タイラカ、ハカリノヲモシ、ハカラウ、ヨコシマ」の訓を収載。このうち「ヨコシマ」の訓が近似訓となる。系統諸本をみるに「ヨコサマ」も「ヨコシマ」も未収載となってしまう。

※61をば [姑ヌナ] 43-4句

『倭玉篇』では「ヲバ」の漢字として「姑」を収載し、「姑」は未収載。字形相似か？

※62キヤウ [玊] 111-5歌

『拾篇集』では工部に「コウ」とする。

※63ギヤウ [樂] 126-4歌

『倭玉篇』『類字韻』では「樂樂樂（ラク／ガク／ゲウ）」は未収載だが、系統諸本のうち『篇目次第』は木部に「樂」の一字に「ラク反、カク反、ケウ反」、『拾篇集』は三語に分ちて収載し、『玉篇略』『音訓篇立』は「ラク」「カク」の二語で「ケウ」は未収載。いずれも「ギヤウ」の音表記は見えない。

64キンヘン [巾] 36-4歌

『倭玉篇』では「キン」とし、篇目を示す「キンヘン」はない。系統諸本も同じ。これも『落葉集』（小玉篇）に示す篇名と同じ「キンヘン」が用いられていると考えた方がよい。

65クワク [霍] 104-1歌

『倭玉篇』『類字韻』では「霍」は未収載だが、系統諸本のほとんどに『弘治二年本倭玉篇』『拾篇集』『玉篇略』『音訓篇立』『篇目次第』『夢梅本倭玉篇』『慶長二年古写本玉篇』『慶長中刊倭玉篇』に「クワク」と見える。

66 ゲウ [樂] 1 2 6-5 句、「ギヤウ」の部分参照。

67 コ [己] 6 1-2 句

『倭玉篇』では「己己己己(イコシキ)」の四字は別々の篇目で取り扱われていて、「己(キ)」と「己(シ/イ)」の二字を収載し、「己(コ)」は未収載。系統諸本のうちこの四字を収載して「己(コ)」を有するのは『拾篇集』『音訓篇立』で『玉篇略』は「コ」「シ」の二字を収載する。

68 セイ [肖] 6-5 句

『拾篇集』『音訓篇立』『篇目次第』『夢梅本倭玉篇』『元亀字叢』は月篇に「セウ」とする。

69 デヤク [狄] 4 7-1 歌

『倭玉篇』では「狄」の音を「テキ」とする。『拾篇集』『夢梅本倭玉篇』『寛文二版玉篇』も同じ。

『音訓篇立』は「テノキ」、『篇目次第』に「徒的切/テキ反、チャウ反」と見える。

70 ホウ [夆] 1 0 7-4 歌

『篇目次第』の夕部に「フウ、ホウ」と見える。『夢梅本倭玉篇』は「カイ」「ヒヨウ」とする。

71 ロ [呂] 1 9-2 歌

『倭玉篇』には「呂」は未収載。ただ『篇目次第』の口部に「良諸切/リヨ反、玉云一別」とし、『音訓篇立』の十二月律名の「中呂(チュウロ) 四月」「南呂(ナンロ) 八月」「大呂(タイロ) 十二月」の中に使用されている。

以上、和訓及び字音訓七十一語について考察した結果、『倭玉篇』の系統諸本に拠り確認された語を整理してみると、単一本でしか確認できない語と複数の諸本によって確認できる語とがある。

(1) 単一本でしか確認できない語

「あめ〔糞〕」は『夢梅本倭玉篇』

「うゑき〔栽〕」は『拾篇集』

「ころ〔比〕」は『弘治二年本倭玉篇』

「さはら〔鱒〕」は『拾篇集』

「たばかる〔男男〕」は『音訓篇立』

「とびうを〔鮎〕」は『慶長二年古写本玉篇』（「トビイラ」）

「にしん〔鯢〕」は『慶長二年古写本玉篇』（「ニシ」）

「ふき〔落〕」は『玉篇略』

「チャウ〔狄〕」は『篇目次第』

「ホウ〔夆〕」は『篇目次第』

これら十語は、『倭玉篇』類以外の文献資料とも更に突き詰めて行く必要がある。

(2) 複数の諸本によって確認できる語

「ひねる」 『拾篇集』 『篇目次第』 『玉篇略』 『夢梅本』 『音訓篇立』 『弘治一本』 『慶長中刊』 『寛文二版』

「クワク」 『拾篇集』 『篇目次第』 『玉篇略』 『夢梅本』 『音訓篇立』 『弘治一本』 『慶長中刊』

「あられ」 『玉篇略』 『夢梅本』 △アラシ 『慶長中刊』 『元龜字叢』

『真草倭玉』

「めめざい」

『元龜字叢』 『玉篇要略集』

この語は『慶長十五年版倭玉篇』になく、系統諸本において見いだせたものだが、どのような関係にあるのかは即断は避けたい。たゞ※印A（中国漢字）の「襲」^{かづく}、「言」^{ことめ}、「摩」^{オリみがく}、「章」^{ふためく}、「姑」^{おは}、B（国字）の「𩺰」^{かます}、「粒」^{くじ}、「𩺱」^{しらいら}、「𩺲」^{しつげ}、「拈」^{なぐさむ}、「磨」^{まる}、「誑」^{やぶさしき}の十二語を特殊漢字訓と認定しておく。

更に他字書その他の文献に譲らねばならない語を指摘したい。それらの語で判明したものは補注にメモとして記し留め置く。このうち節用集に依拠する語が十四例程ある。

補注メモ

6 「いもうと」は節用集類に「娣」の用字で『天正本』に「イモウト」と見える。

7 「うぐひ」は節用集類に「𩺱」の用字で『文明本』『饅頭屋』『印度本』（「ウグイ」）に見え、『宣賢卿字書』も同じ。

『延喜式』第三十九に「伊具比魚」、『出雲風土記』出雲郡に「伊具比」（「うぐひ」の古名）

『源平盛衰記』卷二十五・鎗奏吉野國栖「栗栖の翁、栗の御料にうぐひと云魚を具して貢御に備奉る」

『言塵集』第五・顕仲の歌「か、り火の光もまかふ玉藻にハうぐひの魚もかくされけり」

『風俗文選』湖水賦「江鮭、鱒の名を交じ、鮭。鮭の味をわかつ」

他に「うぐひ」の用字として「經」（下学集・合類）、「𩺱」（字鏡抄・伊京集）、「𩺱」（易林本・物類称呼・俳字節用集）、「𩺱」（大和本草）、「𩺱」（合類）と種々の字を用いている。

8 「うば」については佐藤武義『「祖父母」の語形変化』（『国語論究1 語彙の研究』昭和六十一年、明治書院）

に詳しい。ここでは「姥」の用字にだけ言及するに、連歌俳諧の

『犬筑波集』(一五三三年成立)一〇九「額ひたのしはすよりあふを見よ 行く年を姥うばのおほぢの忘るらん」が初出例。また連歌俳諧の用語として「姥櫻、姥柳、白姥」とがある。

『醒睡笑』(一六二三年成立)卷三文の品々「など云含けるか姥ウバ文を見てあめやさめと泣(略)いはらに小石を包そへつかはしむば方より其中へこぬかを包みそへて帰しぬ」

など「老婆」の意に多く用いられ、やがて西鶴の浮世草子等で「老婆」そして『好色二代男』(一六八四年)に「きのふまで子を抱し姥(うば)のあき懐になりて」の如く「乳母」の意に用いられる。

12 「ゑそ」は『温故知新書』そして節用集類で、「鱧」の用字にだけ言及するに『文明本』『天正本』『饅頭屋』『黒本本』『印度本』(堯空本(エソ)弘治・永禄本(エソ)『和漢通用集』)とに見える。『運歩色葉集』。

『醒睡笑』卷三自堕落「鱧ウツを反古につ、み焼飯にそへて食せんとする時旦那來れり」

23 「くのぎ」は「櫟・櫪」の用字で「くぬぎ」、室町時代頃から両用し、この母音転訛は他に「上塗り(うはぬり)」「名主(なぬし)」があり、『日葡辞書』に「Cunogui (クノギ) r Cunugui(クヌギ)」。

26 「けやき」は節用集類に、「櫪」の用字で『文明本』(「ケヤケ)『伊京集』『饅頭屋』『印度本』『易林本』に「ケヤキ」と見える。

33 「さはら」は節用集類に「鱒」の用字で『文明本』『明応本』『天正本』『黒本本』『印度本(弘治二)』『和漢通用集』に「サワラ」、『伊京集』『易林本』『印度本(堯空)』『書言字考節用集』『惠空編節用集大全』に「サハラ」と見える。

34 「しいら」は普通「鱒」の用字で『印度本』『易林本』に見えるが、「鰻」の用字に「シイラ」はない。『書言字

考節用集』合類節用集』俳字節用集』は「イナダ」とする。特殊漢字訓と定める。

35 「しつけ」は普通「躰」の用字で『文明本』『印度本』『和漢通用集』、「躰」の用字は『和漢三才図絵』『浮世風呂』(文化十・一八一三年)、『音訓国字格』(文政八・一八二五年)、『倭字攷』に見える。

36 「すくふ」は節用集類に、「匕」の用字で『文明本』『饅頭屋』『黒本本』『印度本』に「スクウ」、『和漢通用集』に「匕すくふ」ひとと見える。

41 「どぢやう」は節用集類に、「鯨」の用字で『文明本』『印度本』『書言字考』に「ドヂヤウ」と見える。

貞門俳諧『紅梅千句』(明暦元刊・一六五五年)第二・蝶に「小鮒まじりの土鯨どぢやうすくへり 可頼」

42 「とびうを」は節用集類に、『印度本』(弘治「トビウヲ」永禄「トビイヲ」「堯空「トビヲ」)と見える。『和漢通用集』も「トビウヲ」と見える。

43 「とぼしび」は節用集類に、「灯」の用字で『文明本』『印度本』『和漢通用集』は「トモシビ」、『天正本』『黒本本』に「トボシビ」と見える。

44 「なぐさむ」は『異体字弁』、西鶴の『世間胸算用』(元禄五・一六九二年)に「拵なぐさむ(なぐさむ)」、『江戸節用』(寶永元・一七〇四年)に「慰なぐさむ拵ハ俗」、『音訓国字格』に「ナグサム」と見える。

45 「にしん」は節用集類に、「鯢」の用字で『伊京集』は「ニシ」、『文明本』『天正本』『饅頭屋』『印度本』『易林本』に「ニシン」と見える。

46 「ねらふ」は節用集類に、「覘」の用字で『黒本本』『印度本』に「ネラウ」、『和漢通用集』に「覘ねらふ目あて」と見える。

47 「ひきがへる」は節用集類に、「暮」の用字で『易林本』に「ヒキガイル」と見える。

49 「ひな」は節用集類に、「鄙」の用字で『易林本』に「ヒナ」と見える。

52 「ふき」は節用集類に、「落」の用字で『文明本』『伊京集』『天正本』『黒本本』『印度本』『饅頭屋』『易林本』
『和漢通用集』に「フキ」と見える。

貞門俳諧『鷹筑波』(寛永十九刊一六四二年)に「佛の座すへんとやねや落かきのたう」

54 「まかなひ」は節用集類に、「賂」の用字で『黒本本』『印度本』『饅頭屋』に「マカナイ」、『和漢通用集』に「賂まかないだい所」と見える。

55 「まつ」は「忝」の用字で談林俳諧の『誹諧七百五十韻』(延寶九・一六八一年)に「砂糖みどりの忝まじの白露 正長」(261項)、「忝まじの陰ゆく施主座敷にや 風」(267項)、『おくれ雙六』(延寶九・一六八一年)に「津輕舍利忝まじの雫や残すらん」(322項)と見える。

56 「ま、」は節用集類に、「儘」の用字で『文明本』『黒本本』『印度本』『饅頭屋』『易林本』に「マ、」、『和漢通用集』も同じ。

『醒睡笑』卷一謂被謂物之由来「寺院を他人に誤ても不譲を法とする儘まじ山の芋はつるをた、してこそ堀なれは芋堀僧といふならん」

卷四聞えた批判「そちは一圓にうちか、り心の儘まじに馳走せられ安々と世を送レ」

59 「やさしき」は『反故集』に「ヤサシク」、寶永元版(二七〇四年)『江戸大節用』に「艶やさしき嬌しやう。誑しやうハ俗。／優美。有情。」と見える。『音訓国字格』に「ヤサシ」

60 「よこさま」は「衡」の用字で『永正本字鏡抄』の初訓として見える。『書言字考節用集』。

『慶長十五年版倭玉篇』に見える語（二〇四語）

○印は『類聚名義抄』に合致する訓、△印は仮名遣等の相違する訓、△印は語形変化による訓であることを示すものである。

◎あかね	〔茜〕	◎あく	〔餼〕	あけぼの	〔曙〕	あつまる	〔雀籠〕 [※]	◎あは	〔粟〕 ^{補注}
◎あぶ	〔虻〕	◎あふひ	〔葵〕	◎あふり	〔鞆〕 ^{あをり}	◎あらし	〔嵐〕	◎イ	〔巳〕
いかに	〔鮎〕 [※]	◎いかり	〔碇〕	◎いかる	〔忿〕	◎いしばし	〔磴〕	◎いそがはし	〔鬪〕 [※]
○いちね	〔櫟〕 ^{いちい}	いつはる	〔姑〕	いとふ	〔雇〕	いなご	〔蝨〕	◎いぬ	〔狗〕
いへ	〔屋〕 ^{いまい}	◎うす	〔臼〕	◎うはなり	〔媼〕 ^{うわなり}	◎えのき	〔榎〕	○えひ	〔鱧〕 ^{えい}
えびす	〔夷〕 ^{えびす}	◎おちいる	〔埵〕	おどろく	〔馬馬〕	◎おぼろ	〔朧〕	かいらぎ	〔威〕
◎かけはし	〔棧〕	かげろふ	〔竦〕	◎かしか	〔柏〕	かづら	〔髭〕	◎かなづち	〔鎚〕
◎かに	〔蟹〕	かはうそ	〔獺〕	かはづ	〔蛙〕	◎かひな	〔肘〕 ^{かいな}	◎かぶらや	〔鎚〕
◎かへで	〔楓〕	◎かま	〔鎌〕	◎かや	〔萱〕	かや	〔栢〕	◎からも、	〔杏〕
かれひ	〔鮓〕 ^{かれい}	◎きり	〔桐〕	◎きり	〔錐〕	きりぎりす	〔蛩〕 [※]	くさぎ	〔榻〕 [※]
くさむら	〔菽〕	◎くすのき	〔楠〕	○くだん	〔件〕	◎くちなし	〔梔〕	△くちばみ	〔蝮〕
◎くつろぐ	〔窀〕	◎くまたか	〔鴟〕	くりや	〔庖〕	◎ケイ	〔圭〕	ゲウ	〔堯〕 ^{きやう}
◎けた	〔桁〕	◎けら	〔蛄〕	こそ	〔社〕	こち	〔鯪〕	◎さかづき	〔卮〕
◎さけ	〔鮭〕	◎さめ	〔鮫〕	◎さる	〔猴〕	しうとめ	〔嬪〕	◎しぎ	〔鳴〕

しころ	〔綴〕	◎したみ	〔羅〕	したや	〔床〕	◎しひ	〔椎 <small>し</small> い〕	◎しび	〔鮪〕
△シヤウ	〔笙〕	◎しりがい	〔鞞〕	◎しりぞく	〔卻〕	◎すき	〔鋤〕	◎すし	〔鮓〕
◎すする	〔啜〕	◎すでに	〔已〕	するめ	〔鯛〕	◎せみ	〔蟬〕	◎ソク	〔燭〕
そくひ	〔粘 <small>そく</small> い〕	◎そばだつ	〔峙〕	たぐひ	〔三〕	だけ	〔嵩〕	◎たこ	〔鮓〕
たすき	〔褌〕	◎たな	〔店〕	たら	〔鱒〕	たるき	〔笥〕	◎タン	〔痰〕
△ヂ	〔痔〕	ちがや	〔茅〕	ちひさく	〔少 <small>ちい</small> さく〕	◎ちまき	〔粽〕	◎ちまた	〔街〕
ちりばむ	〔鑠〕	◎つぐみ	〔鶉〕	△つぐる	〔諗〕	つた	〔蔦〕	◎つち	〔槌〕
◎つづる	〔綴〕	◎つばき	〔椿〕	つもる	〔庫〕	といし	〔砒〕	◎とち	〔棚〕
◎とどまる	〔止〕	とどまる	〔奄〕	◎とどろく	〔轟〕	◎とま	〔苦〕	◎ともしび	〔燈〕
ともゑ	〔巴 <small>とも</small> へ〕	ないがしろ	〔要〕	◎ながら	〔乍〕	◎なげく	〔啗〕	△なし	〔棠〕
◎なはて	〔啜 <small>な</small> わて〕	◎なぶる	〔鵬〕	△なべ	〔鎗〕	◎なまぐさし	〔咄 <small>羊</small> 羊〕	◎なまづ	〔鯨 <small>な</small> ます〕
◎なよし	〔鰯 <small>な</small> よし〕	ならぶ	〔并〕	◎なり	〔也〕	◎にごる	〔浚〕	◎にじ	〔虹〕
◎ぬえ	〔鴈 <small>ぬ</small> え〕	ねや	〔閨〕	◎のこぎり	〔鋸〕	△のぶる	〔信〕	△のぶる	〔宣〕
◎のみ	〔蚤〕	◎はぎ	〔萩〕	△はこべ	〔藜〕	◎はし	〔箸〕	△はたじるし	〔幟〕
はつるる	〔迦〕	△はなむけ	〔餞〕	△はまち	〔飯〕	◎はんざう	〔椽〕	ひいらぎ	〔柊 <small>ひ</small> らぎ〕
◎ひかり	〔晶〕	△ひく	〔彎〕	◎ひげ	〔髭〕	◎ひさぎ	〔楸〕	◎ひさし	〔庇〕
◎ひち	〔臂〕	ひちりき	〔筭〕	ひとがた	〔俑〕	◎ひとへ	〔禪〕	◎ひとへ	〔偏〕

◎ひのき	[檜]	◎ひばり	[鶺鴒]	◎ひびらく	[疼]	◎ひゆ	[菟]	◎ひる	[蛭]
◎ひろふ	[掇]	ふかし	[水水]	◎ふさぐ	[閑]	◎ふしまろぶ	[蹬]	◎ふすま	[衾]
◎ふたつ	[二二]	ぶり	[鯽]	ふるまふ	[扱]*	◎ほころぶ	[綻]	まがき	[筴] ※「扱」佛上39
まき	[楨]	◎ます	[鱒]	◎ます	[倍]	◎み	[箕]	みがく	[摩]
みそさんざい	[鷓]	みだれがみ	[鬆]	◎みちびく	[衙]	◎みね	[岑]	◎みみづ	[蛭]
◎みやこ	[洛]	◎むかで	[蚣]	△むくれんじ	[欒]	むこ	[甥]	◎むこ	[聾]
◎むじな	[貉]	◎むながい	[鞞]	むろ	[窰]*	○めぐる	[絡]	めひ	[姓] ※漢字注「土室」
◎もとどり	[髻]	◎ものうし	[倦]	◎やみ	[闇]	◎やや	[良]	◎よめ	[婬]
◎わく	[涌]	わざはひ	[尻] わざわい	◎わし	[驚]	△みのこ	[豕]	△ゑんじゆ	[槐]
◎をぎ	[荻]	をぢ	[姆]	◎をば	[姨] ちば	◎をひ	[甥]		

右の一覧に示した傍訓漢字の中で、『慶長十五年版倭玉篇』にのみ収載され、「倭玉篇」類系本に拠ったものと思われる訓を割り出す手続きとして、先行字書『類聚名義抄』に未収載の漢字訓を礎として字類抄・字鏡抄類・韻略・節用集類から抜粋してみることにした。以下列举してみるに、

一、『類聚名義抄』に未収載の漢字訓

※いつはる [媧] 永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「アフ」。字類抄・字鏡抄類・

韻略・節用集類にも未収載。

かいらぎ [鰈] 永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔は「魚也」で訓は未収載。白河本字鏡集は標出

漢字のみ、節用集類の黒本本・伊京集・天正本の漢字注・饅頭屋本に「カイラギ」と見える。合類節用集にも見える。

※かれひ

〔^{かれひ}鮒〕 永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「^{タラ}鮒」で「カレイ」、字類抄・字鏡抄類・韻略・節用集類にも未収載。合類節用集に「カレイ」と見える。

したや

〔床〕 永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「下屋也」と訓は未収載だが漢字注で合致する。

※たぐひ

〔三〕 字類抄・字鏡抄類・韻略・節用集類にも未収載。

たすき

〔褌〕 永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集「衣中也」で訓は未収載。寛元本字鏡集は漢字注「衣中也／襌」、世尊寺本字鏡も漢字注「襌」の字で「タスキ」と読める。

たら

〔鱈〕 永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集も未収載。節用集類の文明本・黒本本・伊京集・天正本・饅頭屋本・易林本に「タラ」と見える。合類節用集は「^{タラ}雪魚」。

つもる

〔庫〕 永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「ツモル、ツム」と見える。

ぶり

〔鰯〕 永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔は標出漢字のみで訓は未収載。寛元本字鏡集は「魚名」、節用集類の文明本・黒本本・伊京集・天正本・饅頭屋本・易林本に「ブリ」と見える。合類節用集にも見える。

二、標出漢字のみで訓のない語

いとふ

〔厩〕 永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「イトフ」と見える。

※かづら

〔髻〕

永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔は「カミ」、字類抄・字鏡抄類・韻略・節用集類には「髻」「髻」の字で収載。合類節用集に「^{カッラ}髻」と見える。

かはづ

〔蛙〕

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔は「アマカヘル、カヘル」、字類抄・字鏡抄類・韻略・節用集類にも「カヘル」で未収載。合類節用集に「^{カハツ}蛙」と見える。

※くさぎ

〔櫛〕

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は標出漢字のみで訓は未収載。字類抄・字鏡抄類・節用集類にも「蜀漆」の字で収載。韻略は未収載。合類節用集も同じ。

くさむら

〔藪〕

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「ムクラ、クサカル」、慶長壬子版聚分韻略に「クサムラ」と見える。字類抄・字鏡抄類・節用集類は「叢」の字を収載。

合類節用集は「叢」の注に見える。

するめ

〔鰯〕

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔は「アカウナキ」、白河本字鏡集は「ウナキ」字類抄は「少蛸魚」、字鏡抄類は「蛸」、韻略は「スルメ」未収載。節用集類の文明本・黒本本・

伊京集・天正本・饅頭屋本・易林本に「スルメ」、合類節用集は「鰯」の字を使用。

ならぶ

〔并〕

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔八部に「ナラフ」、十卷本伊呂波字類抄・聚分韻略に「ナラブ」と見える。白河本字鏡集はこの訓未収載。

ひとがた

〔俑〕

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集は「偶人也／トウ」、天文本字鏡鈔・白河本字鏡集「偶人也」、十卷本伊呂波字類抄は「人形、偶人（ヒトガタ）」、韻略・節用集類は未収載。

まがき

〔筥〕

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「竹名」、倭玉篇類の音訓篇

立は「ユカ、アフリモノ、クシ」、字類抄・字鏡抄類・節用集類は「籬」の字を収載。慶長壬子版聚分韻略に「マガキ」と見える。合類節用集・惠空節用集大全にも「マガキ」と見える。みそさんざい「鷓」永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔は「チカシ、ス、メ、ハシタカ、ヒハリ、タカ、カヤクキ」、

寛元本字鏡集は「カヤクキ」が「カキクキ」、白河本字鏡集は「タカ」の訓だけが無く後は同じ。字類抄・字鏡抄類・韻略は未収載。節用集類のうち文明本は「鷓」、黒本本・伊京集・天正本は「鷓」の字で「ミソサ、イ」と読んでいる。合類節用集は「鷓鷓、巧婦鳥、鷓、工雀」を収載。

みだれがみ「鬆」永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「髻・鬆」で「ミタレカミ」と見える。

めひ「姓^{めい}」永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・白河本字鏡集に「ハユカム、メヒ」、天文本字鏡鈔は「ハニカム、メヒ」と見える。

をぢ「姆」永正本字鏡抄に「ヲシ」、惠空節用集大全に「おち」と第二拍清音で見える。寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「ミチ、イワハ、ハ、ウネ、ヲヒ、ナシ、乳母也」で第一訓「ミチ」は「ヲ」との字形相似による誤写かもしれない。

三、標出漢字及び漢字注のみの語

くりや「庖」永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「クリヤ」と見える。

※しころ「鋳」永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は標出漢字のみで訓は未収載。

字類抄・字鏡抄類・韻略は未収載。節用集類のうち文明本「𦉳」、饅頭屋本「𦉳」で収載。合類節用集に「シコロ」と見える。

ともゑ

[巴]

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集雑字部に「蟲也」、字類抄・字鏡抄類・韻略には未収載。節用集類のうち文明本・易林本に「トモエ」と見える。合類節用集にも見える。

ねや

[閨]

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集に「ネヤ、チヒサキカト」、天文本字鏡鈔「ネヤ、チササキカト」。白河本字鏡集は「ネヤ、チイサキカト」と見える。

むろ

[窻]

永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「ムロ／ツチムロ」と見える。永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔戸部に「タシナム／ワサハヒ」、白河本字鏡集

わざはひ

[瓦]

は「タシナム」だけで「ワサハヒ」は未収載。

このうち、「くりや」は「厨屋」、「わざわい」は「厄字」と『類聚名義抄』に漢字注があるので訓意に通じる。

四、『類聚名義抄』と異なる訓の語

あけぼの

[曙]

名義抄は「アケヌ／アカツキ／アサホラケ」、永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「アケヌ、アク、ヒル、アサホラケ、アキラカ、アカツキ」と訓は増加しているが該当する訓はない。字類抄は「晨朝、凌晨、味爽」、字鏡抄類は「曙、瞳」の字を収載。慶長壬子版聚分韻略に「曙 暁也／アケホノ」、節用集類のうち文明本は「凌晨、味爽」、黒本本、天正本漢字注・饅頭屋本・易林本に「曙（アケホノ）」と見える。合類節用集は「未明」

の字を使用。

いなご

〔蝨〕

名義抄は「イネツキコマロ」、永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「イナゴマロ」、十卷本伊呂波字類抄・聚分韻略・節用集類のうち黒本本、易林本に「イナゴ」と略訓した語が見える。文明本は「蝗」、合類節用集は「イナゴマロ蚱蜢ソマウ」の字を使用。

いへ

〔屋〕

名義抄は「ヤ」、永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「いへ、ヤ」慶長壬子版聚分韻略に「イエ」と仮名遣いも同じ訓が見える。字類抄は「家、宅、弟」の字を収載。

えひ

〔鱒〕

名義抄は「エビ」、十卷本伊呂波字類抄「鱒魚 エビ」永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「エビ」、寛元本字鏡集は「エビ、シミ／口在腹下魚」と見える。

えびす

〔夷〕

名義抄は「タヒラカナリ、ヤブル、キス、ツネニ、ナラス、ヤスシ、ヨロコフ、コロサレヌ・ス」、永正本字鏡抄雑字部に「ウスキ、ツネニス、アハク、エヒス、ヤフル、タヒラク、ナラス、ワキマフ、ヤスシ、ウヤマフ、カロフ、ヒトシ、タヒラカナリ、ホロホス、コロス」と第四訓に、天文本字鏡鈔も第四訓に「エヒス」、慶長壬子版聚分韻略にも「エヒス」と仮名遣いも同じ訓が見える。白河本字鏡集は「カクル」を増加し、第十三訓に「エヒス」。

おどろく

〔馬馬〕

名義抄は「ハシル、ムラカル、ト、ロク」、永正本字鏡抄・寛元本字鏡集に「ムラカル、ト、ロク、ハシル、ヲトル、ヲトロク、ヲル、アヒミル」と第五訓に、天文本字鏡鈔は第七末尾訓、白河本字鏡集には第一訓「ヲトロク」の訓が見える。

「紙、鯛」、易林本は「鯛」を収載。合類節節用集は「鯛、鮭」の字を使用。

※しうとめ

〔嬭〕

名義抄は「アナツル」、永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「媠、嬭」とする。「しうとめ」として字類抄は「外姑、姑、姁」、字鏡抄類は「姑、媠」、韻略「媠、媠」、節用集類は「媠」の字を収載。

※そくひ

〔粘^{そくい}〕

名義抄は「アメツク／ネ／エツク」、永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「アメ、ヒラハル、ネヤカリツク」、寛元本字鏡集は「ツメ、カス」を増加して同じ。字類抄は「ソクイヒ(續飯)」、字鏡抄類・韻略は未収載。節用集類のうち文明本は「ソクイ、粘粘、續飯」。天正本は「ソクイ、(續飯)」易林本に「ソクイヒ(粘、續飯)」と見える。合類節用集は「ソクイヒ」で「粘飯」の字を使用。第四拍の「ヒ」を省略脱落して「そくい」、または母音調和した「そくひ」の語形は歌字盡と『慶長十五年版倭玉篇』系のみとなる。

だけ

〔嵩〕

名義抄は「サカシ／タカシ」、永正本字鏡抄・白河本字鏡集は「ミネ、タカシ、タケ」、天文本字鏡鈔は第三訓が「ダケ」、十卷本伊呂波字類抄・文明版聚分韻略に「タケ」と見える。寛元本字鏡集は第三訓「タケ」が無く「ヲカ」とする。節用集類のうち黒本本・天正本・易林本は「ダケ」と見える。下学集も「ダケ」。

※たるき

〔笱〕

名義抄は「ツ」、永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「ツ」、タケノツ、とする。「たるき」の訓として字類抄は「柵」、字鏡抄類は「椽、椽、椽、椽、椽」、韻略は「椽、椽、椽」、節用集類は「椽」を収載。合類節用集は「椽」の字を使用。

ちがや

〔茅〕

名義抄は「チイ」、十卷本伊呂波字類抄・永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「チ」、聚分韻略に「チカヤ」と見える。節用集類のうち文明本・黒本本・天正本・易林本に「チガヤ」と見える。合類節用集は「白茅」で「チガヤ」とする。

ちひさく

〔少^{ちひさく}〕

名義抄は「スクナシ、ワカシ、シバラク、スコシ、ヤウヤク、カク、スコシキ、ナシ、マレナリ、ヲサナシ、イトキナシ、オボロケ、オロカナリ」、永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「ヲロカナリ、イトケナシ、ヤウヤク、カケタリ、マカレリ、ワカシ、スクナシ、スコシキナリ、ツラムス、オホ^ヲロケ、カク、ナシ、スコシ、マレナリ、ヲサナシ、シハラク」とする。「ちひさし」の訓として字類抄は「小、穉、私、策、約、稊、稚」、字鏡抄類は「小・・・」、韻略は「麼」、節用集類のうち黒本本・饅頭屋本・易林本は「小」、そして文明本に「小、少、蕞」と見える。合類節用集は「小」の字を使用。

※ちりばむ

〔鑠〕

名義抄は「ヨシ、ヨミス、カネワカス、ワカツル、ケス、ワク・カス、ツク、イル、ノホキリ、カフト、ネヤス、ヤフル、ミカク」、永正本字鏡抄は「ヨシ、ワカツル、ヤフル、ワク、ワカス、カス、カネワカス、ミカク、ツク、ヨミス」、天文本字鏡鈔も第四訓に「ケス」を加入して同じ。白河本字鏡集は「ヨミス」を欠く。字類抄は「鑠、鑠」、字鏡抄類は「鑠、鑠、鈿、銘、鉸、鑠」、韻略は「鑠、鉸」、節用集類は「鑠」を収載。合類節用集も「鑠、鉸」の字を使用。

つた

〔葛〕

名義抄は「ホヤ」、永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔に「ツタ、クロ^ツキ、ホヤ」、

白河本字鏡集に「ツタ、クワイ、ホヤ」と見える。

※とどまる

〔奄〕

名義抄は「オホフ、タチマチ、ヒサシ、クチスホ、ヤム、イタル、ニハカ、キサク、オホイナリ、スナハチ」、永正本字鏡抄「クチスホ、ヲロカ、オホフ、ニハカニ、ヒカク、オナシ、スナハチ、オホキナリ、ヤム、ヲソフ、イタル、トル、ヒサシ」、天文本字鏡鈔は第九訓に「タチマチ」を加入、白河本字鏡集は仮名遣い「オ」を「ヲ」にして同じ。字類抄・字鏡抄類・韻略・節用集類(文明本・天正本)はさん水篇の「淹」の字(他の字は略す)で「とどまる」の訓を収載している。合類節用集は「淹」の字もない。

ないがしろ 〔要〕

名義抄は「モトム、カナラス、ネカフ、オヒタリ、チキル、ニハカニ、メス、トシ、サハラ、モハラ、ニクニ」、永正本字鏡抄「ヲヒタフ、ネカフ、モトム、チキル、イル、カナラス、チカフ/モハラ、ハク、メス、モテ、ウク、ヨル、ニハカニ/サハク、ヘタツ、トシ」天文本字鏡鈔も「ヲヒタリ、サハラ、ヘタ」の三訓の語変化の異同があるだけで同じ。字類抄は「蔑尔、蔑如、蔑忽」、字鏡抄類・韻略・節用集類は「蔑」を収載。ただし、文明本節用集に「要」で「ナイガシロ」の訓が見える。合類節用集は「蔑」の字を使用。

はつるる

〔迦〕

名義抄は「カナフ」、永正本字鏡抄に部に「ハツル、カナフ、キラフ、カラスノコエ、ヲサム」と見える。天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は初めと終りの二訓「ハツル、ヲサム」を欠いている。聚分韻略は「ヲサム」(文明版加筆訓に「ハツス」とする。更に『太平記』卷九・一、二八六に「早今日ノ合戦ハ迦(ハツ)レヌル事コソ安カラネ」と見える。字類抄は「剗」、韻略は未収

載。

ひいらぎ

〔椈^{ひいらぎ}〕

名義抄は「サイツチ」、永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔は「木ノ名」、白河本字鏡集は「木名」とある。字鏡抄類は「榕」、節用集類のうち天正本・饅頭屋本は「榕（ヒラギ）」、易林本は「櫨、櫨（ヒラギ）」を収載。伊京集に「ヒイラギ」そして文明本に「ヒラギ」と見える。合類節用集は「椈木」の字を使用。

ひちりき

〔萩〕

名義抄は「ハラ／クタ」、永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集に「ヒチリキフク」とある。韻略は未収載。

※ふかし

〔水水〕

名義抄は「ハルカナリ、オホイナリ、ヒロシ、タ、フ、オホミツ、ソニカケ」、永正本字鏡抄「ハルカナリ、ヲホイナリ、タマリミツ」、天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は加訓「ヒロシ、タ、フ、ヲホミツ」を付している。字類抄・韻略・節用集類にも未収載。

まき

〔榎〕

名義抄は「コハシ、カタビヲ、ハリカタ、クヒセ、ミヤツコキ」、永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集は「コスへ、ヲキル、キノスエ」とする。節用集類には「マキ」と見える。合類節用集も同じ。

※みがく

〔摩〕

名義抄は「ナツ、スル、チカシ、ウルワシ、ヒク、ハタク、トグ、シタカフ」、永正本字鏡抄「トク、ナツ、ヒク、ウルハシ、カクセム、ナツカクス、スル、チカシ、シタカフ」、天文本字鏡鈔は訓の配列を異にするのみで同じ。字類抄・字鏡抄類・韻略・節用集類にも未収載。字鏡・節用集で「みがく」は「磨」の字を使用。

※むこ [擧] 名義抄は「ヲヒ、メヒ」、永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔も同じ。「むこ」は「壻、聳」の字を使用。

五、略訓と加訓の語

シヤウ [笙] 「シヤウノフエ」名義抄↓「シヤウノフエ」永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集

ヂ [痔] 「ヂノヤマヒ」名義抄↓「ヂノヤマヒ」永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集

なし [棠] 「山ナシ」名義抄↓「ナシ」易林本節用集(他は「梨」の字のみ使用、合類節用集も同じ)

なべ [鑑] 「アシナベ」名義抄↓「アシナベ」永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集↓「ナベ」十卷本伊呂波字類抄・聚分韻略

はこべ [藜] 「ハコベラ」名義抄(十卷本伊呂波字類抄「藜藜」・伊京集)、(永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔「シロヨモキ」、白河本字鏡集「シロヨモキ、シケシ」、聚分韻略「ウキクサ」)↓「ハコベ」

饅頭屋本節用集(他は「藜菜」)

はたじるし [幟] 「ハタジルシ」名義抄(易林本節用集・合類節用集)↓「シルシノハタ」永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集

はなむけ [餞] 「ムマノハナムケ」名義抄↓永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集↓「ハナムケ」十卷本伊呂波字類抄・節用集類・合類節用集、「ハナムケス」聚分韻略

はまち [鮓] 「ハリマチ」名義抄(十卷本伊呂波字類抄「鮓魚」)↓永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河

本字鏡集↓「ハリマチ／ハマチ」寛元本字鏡集↓「ハマチ」文明本・天文本節用集・合類節用集

ひく

[彎]

「ユミヒク」名義抄↓「ユミヒク／ヒク」永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集↓「ヒク」天文本字鏡鈔

むくれんじ

[變]

「ムキレムシノキ」名義抄↓「ムクレンシノキ」(十卷本伊呂波字類抄)↓「ムクレンシノキ／ムクレンシ」永正本字鏡抄・白河本字鏡集↓「ムクレンシ」饅頭屋本節用集、「ムクレンジ／ムクロジ」恵空節用集大全・反故集↓「ムクロジ／モクレンジ」合類節用集、その他「ムクケンシ」文明本節用集

ゑんじゆ

[槐]

「エンズノキ」名義抄↓「エンスノキ／エンス」永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔↓「エンス、カツラ」白河本字鏡集↓「^エエンジユ」節用集類(易林本「エンズ」)・合類節用集

くちばみ

[蝮]

「ハミ」名義抄↓(十卷本伊呂波字類抄)↓永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔↓「クチバミ」倭玉篇、「クチハミ」節用集類(易林本「クチハメ」)

といし

[砥]

「ト」名義抄↓「トイシ」永正本字鏡抄・寛元本字鏡集・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集

ゐのこ

[豕]

「キ」名義抄↓「キノコ」永正本字鏡抄・天文本字鏡鈔・白河本字鏡集↓「キノコ」(十卷本伊呂波字類抄)

このように※印を付した漢字訓十六語が先行字書(類聚名義抄以下諸字書)に見えない訓となる。これを今、『慶長十五年倭玉篇』系(『類字韻』など)に依拠したものと指摘することができる。

また「たら(鱒)」のような下学集・倭玉篇・節用集といった室町時代の字書に登場した新種の語を収載している点も伺えて興味深いものがある。今後、『小野篁歌字盡』の編者が活躍したと思われる一六六〇年代を手掛かりに、京都を中心とした連歌俳諧における漢字傍訓、そして俳諧から浮世草子へ転じた井原西鶴など本書以後の作品における漢字傍訓についても同様の調査を進めて行かねばならない。

参照文献一覧(この段を記すに当たって使用させて戴いた多くの文献資料に感謝の意を表する次第である。)

1字書『倭玉篇』類

- ① 中田祝夫・北恭夫編『慶長十五年版倭玉篇研究並びに索引』(勉誠社刊)
- ② 中田祝夫・北恭夫編『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』(勉誠社刊)
- ③ 原装影印版増補 古辞書叢刊『和玉篇』(古辞書叢刊刊行会)
- ④ 原装影印版増補 古辞書叢刊『玉篇略』大東急記念文庫蔵(古辞書叢刊刊行会)
- ⑤ 古辞書音義集成 『音訓篇立』上・下・索引(汲古書院刊)
- ⑥ 『拾篇集』『慶長中刊倭玉篇』『慶長二年古写本玉篇』『寛文二年版玉篇』は国会図書館蔵の写真複写使用。
- ⑦ 『元亀字叢』は西尾市立図書館蔵の複写を使用。
- ⑧ 『玉篇要略集』は川瀬一馬編『古辞書の研究』記載資料六九一項を参照。
- ⑨ 小島幸枝編『耶穌会板落葉集総索引』(笠間書院刊)
- ⑩ 原装影印版増補 古辞書叢刊『類字韻』(古辞書叢刊刊行会)

2字書『節用集』類

- ① 中田祝夫編『文明本節用集研究並びに索引』(勉誠社刊)
- ② 亀井孝編『五本対照改編節用集』(勉誠社刊)

- ③ 中田祝夫編『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引』（勉誠社刊）
 - ④ 中田祝夫・根岸剛士編『和漢通用集研究並びに総合索引』（勉誠社刊）
 - ⑤ 中田祝夫編『合類節用集研究並びに索引』（勉誠社刊）
 - ⑥ 中田祝夫・小林祥次郎編『書言字考節用集研究並びに索引』（風間書房刊）
 - ⑦ 『俳字節用集』『江戸大節用』（家蔵本）を使用。
- 3字書『字鏡』類
- ① 中田祝夫編『字鏡集 白河本・寛元本・天文本研究並びに総合索引』（勉誠社刊）
 - ② 古辞書音義集成『世尊寺本字類抄字鏡』（汲古書院刊）
- 4字書 その他

- ① 正宗敦夫編『観智院本類聚名義抄』本文・索引（風間書房刊）
- ② 奥村三雄編『聚分韻略の研究付古本四種影印慶長版総索引』（風間書房刊）
- ③ 木下正俊編『伊呂波字類抄国語索引』（私家版）
- ④ 原装影印版増補 古辞書叢刊『十卷本伊呂波字類抄』（古辞書叢刊刊行会）
- ⑤ 京大言語国文学研究室編『元龜二年本運歩色葉集』（臨川書店刊）
- ⑥ 京大言語国文学研究室編『分類体辞書 宣賢卿字書』（臨川書店刊）
- ⑦ 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店刊）
- ⑧ 『温故知新書』（白帝社刊）
- ⑨ 古辞書叢刊2『元和三年刊本下学集』（新生社刊）
- ⑩ 『日本国語大辞典』（小学館刊）

5 一般作品

- ① 『延喜式』新訂増補国史大系（八七五項）を参照。「但ヒ蛭并伊具比魚煮凝等隨得加進」。
- ② 『出雲風土記』岩波日本古典文学大系（一九三項）を参照。「則有年魚鮭麻須伊具比魴鱧等之類」

- ③ 『源平盛衰記』・四 蓬左文庫蔵影印(汲古書院刊)を参照。
- ④ 『言塵集』松平文庫蔵複写本を使用。
- ⑤ 『風俗文選』(岩波文庫)を参照。
- ⑥ 『物類称呼』卷二(日本古典全書)四七項「うぐる」を参照。
- ⑦ 『犬筑波集』鈴木棠三校注(角川文庫)の冬部、四五項を参照。
- ⑧ 『醒睡笑』静嘉堂文庫蔵 岩淵匡編(笠間書院刊)を参照。
- ⑨ 『紅梅千句』日本俳書大系貞門俳諧集(春秋社刊)一四四項を参照。
- ⑩ 『音訓国字格』高井蘭山編(家蔵本)を使用。
- ⑪ 『倭字攷』岡本保孝編 異体字研究資料集成・第九卷(雄山閣刊)を参照。
- ⑫ 『和漢三才図絵』(吉川弘文館刊)の藝才「倭字」に「躰しつげ 教禮訓法之ノ小學俗日躰」二六七項を参照。
- ⑬ 『浮世風呂』岩波日本古典文学大系を参照。
「躰しつげるとなしきやうぎに行義ぎやうぎがよくなります」(一一二九項)
「ねがはくは幼少まうせうな時分じぶんから躰しつげが大切たいせつさナ。」(一二四二項)
- ⑭ 『世間胸算用』日本古典文学全集(小学館刊)を参照。
「常住じやうちゆうは、奈良なら芋そをなぐさをなぐさのやうにひねりて日ひをくらせしが、」(三九三項)
- ⑮ 『鷹筑波』日本俳書大系貞門俳諧集(春秋社刊)二七二項を参照。
- ⑯ 『反故集』近世文学資料類従 古俳諧編47(勉誠社刊)三九八項を参照。
- ⑰ 『太平記』岩波日本古典文学大系を参照。
- ⑱ 『誹諧七百五十韵』『おくれ雙六』日本俳書大系談林俳諧集(春秋社刊)を参照。